

# 電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

## 第七回

### 第七章 勤め人の生き方

1

丸三商会まるさんの失敗で私は信用絶無の男になってしまった。多くの友人に裏切られ、妻であるふさからも本心からの信頼を得ていない。

失意の時に、福澤先生ふくざわが亡くなった。このとき、私は重石おもしが消えたような解放感を味わった。代わりに、別の感情をもたらした。責任感である。

軽薄な私に責任という言葉は似つかわしくないのだが、福澤諭吉ゆきちという巨星が墮おちたことで、ふさや義母のきん様が見る目が違ってきたからだ。

では、私はどのように行動すべきなのか。ふさやきん様に、福澤家のことは私にお任せください、とばかりにしゃしゃり出るべきな

のか。あるいは私を裏切り、見捨てた友人たちを見返してやるとばかりに新しい事業に手を付けるべきなのか。

軽薄だが慎重なところもある私は、時を待つことにしたのである。

何事にも「時」がある。生まれる時、死ぬ時。嬉しい時、悲しい時。芽吹く時、枯れる時……。

そして次の飛躍の時を待つ「雌伏の時」もあるのだ。ただ、飛躍する時はいつ来るかわからないからこそ人は我慢できず、拙速せつそくに飛び出して、上手うまく風に乗れずに墜落ついでくする。私にも飛躍の時があるのかわからない。しかし、今が雌伏の時であることはわかる。

まずは、信用絶無の評価をなんとかしなくてはならない。これは私の恥であり、このままでは泉下せんかの父母にも申し訳ない。

私は、専務で実質的な社長である井上角五郎いのうえかくごろうに頼み込み、北海道炭礦鉄道たんこうに再度入社した。

明治三十四年（一九〇一）七月五日のことである。役職は監事、仕事は井上の秘書である。月給は百円という待遇だった。

ふさもきん様も、私が勤め人になったことで安心した。ようやく株式相場や独立起業など不安定で波乱の人生から足を洗ってくれた、福澤家もこれで安泰だと思ったのだ。

何度も述べるが、私は軽薄である。実際、仕事に於おいて腰が定ま

らないし、株で言えば逃げ足も速い。たとえ友人から頼まれて購入した株であっても、嫌な予感がすれば遠慮なく売り払う。友人はそんな私を誘<sup>そし</sup>るだろうが、一向に意に介さない。恨めしそうな顔で私を見つめる友人に、軽薄だからと笑って済ませることもある。

しかし、軽薄でもいい加減ではない。杜撰<sup>ずさん</sup>でだらしないのだ。仕事に対しては真面目<sup>まじめ</sup>である。損得の判断も厳格である。

私は、北海道炭礦鉄道に復職するにあたって、この際、勤め人道というものを極める決意をした。

人生には、無駄なものは一切ない。全てが自分の血肉となりうる。裏切りも失敗も、である。

丸三商会の失敗が、無駄ではなかったと証明するためにも勤め人に徹してみようと考えた。また新たな自分に出会えるかもしれないではないか。

## 2

会社に入れば出世したいというのが誰しも望むところだろう。出世すれば、報酬が増えるだけではなく仕事上の満足度も増す。いつまでも下働きでは、権限も大きくならず、やがて仕事がつまらなくなる。会社に入った以上は、出世することを心掛けねばならない。

私は、幸いにも実質社長である井上角五郎専務の秘書役という厚遇を以て迎えられるが、それに甘んじるわけにはいかないと覚悟した。

というのは、井上専務は、波乱の半生を歩んだ厳格な人であるからである。

井上専務は、万延元年（一八六〇）生まれの四十一歳。私より八歳上である。生まれは備後（広島県）で、十四歳で小学校の教師になったという神童だった。

二十歳の時、慶應義塾に入り、福澤先生の門下生となった。すぐに才能を見いだされ、明治十五年（一八八二）十二月に、日本公使館焼き討ち事件などで混乱が続く朝鮮に政府顧問として派遣された。これは福澤先生の推薦である。

井上専務は、朝鮮の混乱を収めるためには人々に教育を施すべきであると考え、新聞を発行することにした。当初は漢字新聞にする予定だったが、福澤先生からハングルを使うよう指示を受けた。当時ハングルは民衆の文字であり、朝鮮の知識層や官庁では使用されていなかった。しかし朝鮮の民衆を教育するにはハングルが適当だと判断した井上専務は、ハングルで新聞を発行した。

朝鮮の混乱は収まることなく、井上専務は、一時、日本に帰国するが、再び朝鮮に渡った。福澤先生が止めるのも聞かず、ハングル

を普及させなければならぬとの責任感からである。

今、朝鮮でハンデルが広く行き渡り、朝鮮の人々が教育を受けられるのは井上専務の努力の賜物たまものであると言えるだろう。

井上専務は、その後、福澤先生の勧めでアメリカに渡り、農業に従事したが、帰国直後、官吏侮辱罪かんりぶじよとざいで逮捕、投獄されるといふ憂うれき目に遭あった。

これは日本の支援を得て、朝鮮を改革しようとして起こしたクーデターこうしん（甲申政変）において、改革派を見捨てたと伊藤博文らいとうひろぶみを批判したと疑われたためである。幸いにも憲法発布の恩赦おんしやで出獄した。その後は政治の世界に飛び込むと同時に、実業界でもその人ありと知られるようになった。

私が見るところ、顔つきは歴戦の勇士こゝとの如く厳めしく、その顔に相応ふさわしい壮士的な人物である。このような骨のある人物に徹底して仕えれば、この上なき信頼を得られるはずである。

成功者に必要とされるものは、いわゆる「運、鈍、根」どん こんである。世に出るには、運が良いことが必要であるのは間違いない。そして「鈍」の意味は、あまり鋭く、人を寄せ付けないようではいけないということ、続く「根」は、根気である。どんなことしんぼうも辛抱して続けることが必要なのだ。

しかし、「運鈍根」の三つが揃っているからといって、成功者に

なれるとは限らない。

ではどうしたら成功者になれるのか。運鈍根以外に何か必要なのか。

世の中で大きく成功、すなわち「大成」するためには、たとえ他人に憎まれようとなにくそと思ひ、それに対抗する力を身につけることが必要であるのは間違いない。可愛がられれば、その上司の庇護の下から抜け出しにくくなるからである。しかし、私ほど憎まれ、仲間から疎<sup>うと</sup>まれてしまつては対抗する力を身につけようにもつけれない。ここは一步引き下がつて、まずは他人に可愛<sup>かわい</sup>がられねばならないのではないか、そう考えた。

私はどちらかと言うと憎まれっ子である。すぐに皮肉を口にするし、偽悪的でもある。

しかし商売をするにも勤め人で出世するにも、まずは、他人に可愛がられなければならないのは自明のことであると、ようやくわかつた。

私はこのことをあまりにも軽視していた。丸三商会の失敗もここに原因があつたに違いない。

亡くなつた中上川彦次郎<sup>なかみがわひこじろう</sup>にしても、私のことが嫌いだからではなく、可愛がらなかったから塾仲間<sup>こ</sup>で図つて、ひとつ懲らしめてやろうということになつたのだろう。

融資を謝絶した三井銀行の村上定は、私に向かつて、君は評判が悪いと断じた。

私は、他人に可愛がられるより自分を貫く道を選んでいたから、勝手な奴だと思われていたのだ。ふさに隠れて相場師のようなことをやる、また貞奴さだやっしにうつつを抜かしている、金に飽かせて頻繁に各地を旅行し、遊興三昧さんまいであるなど。私を巡る悪評は千里を走っていた。私は、それも名誉の一つだと思い、意に介していなかったが、塾仲間の間ではそうではなかったのだ。

「桃介ももすけは福澤一門の恥である」「あんな男を婿むこにもらったふささんが可哀かわいそうだ」「福澤先生の体調が悪化したのも桃介のせいだ」などと言われていたのだ。

私は、どうしたら人、すなわち上司や取引先に可愛がられるか、考えられるあらゆることを実践することにした。

ある時、井上専務からある人物と親しくなっておくようにと言われた。

その人は企業経営からは既に引退すてはしていたが、政界や財界に隠然たる力を持っていた。井上専務といえどもなかなか親しく接するわけにはいかなかったらしい。

私は、その某氏ぼうしの趣味を調査した。人は好みがいろいろである。中には無趣味の人もいるが、面会かなが叶った時になんの話題から入る

かで、相手から見て私の印象が違ってくる。

歌舞伎かぶきが好きであるとか、浄瑠璃じょうるりが好きであるとか。小唄、長唄を習っているとか。

性格も知る必要がある。短気な人なのか、鷹揚おつような人なのか。時間に厳格な人なのか、それほどでもないのか。

家族関係も知っておく必要がある。妻は、妾めかけは。子どもはいるのか。

郷里のことや、出世するまでの道のりのことを調べるのは当然のことだ。戊辰戦争ぼしんでは官軍側であったのか、それとも徳川親藩であったのか。もはや遠い昔のように思われる話でも、ふとした際に口の端はに上ることがある。その際、間違えると、今でも腹を切れと怒り出す人がいると言う。

人は何を喜ぶのか。それは第一に自分のことに関心を持ってくれるかどうかである。これは子どもであろうと大人であろうと変わらない。相手が自分に関心を持ってくれることほど満足を感じることはない。赤ん坊が、母親に向かって大きな声で泣くのは、お腹が空いていることもあるだろうが、自分に関心を持って欲しいからだという話もあるほどだ。

情報集めに完璧はない。ある程度集まったら、某氏の事務所に足を運ぶことにする。

その際にも、私は様々な工夫を凝らすことに努めたのである。

3

私はかつて北海道炭礦鉄道の新入社員時代に身につけた「将を射んと欲すればまず馬を射よ」の策に従い、受付の女性と親しくなることに努めた。菓子などの手土産を持参し、世辞を言い、その後、女性に「福澤桃介という者ですが、某氏にご面会したい」と伝えただが……。

受付の女性はそっけない態度である。これに腹を立ててはいけな  
い。手土産や世辞がそんなにすぐに効果を發揮するほど、世の中は  
甘くない。

今の私は勤め人であり、井上専務の忠実な秘書である。某氏との  
面会を実現することが使命なのである。使命を達成するためにはプ  
ライドを軽く捨て去り、恥をかくことを厭わ<sup>いと</sup>ないことが必要であ  
る。いずれにしても私は、受付の女性にも尊重されないと  
見ると、それほど世間に名を知られた存在ではないことを自覚させら  
れたことは事実である。

「そうですか。ではまた出直してきます」

私は素直に引き下がる。

それからは、うるさがられるかどうかのぎりぎりの間合いを見つ  
つ、訪問を繰り返すのだ。その際、迷惑がられようと花やお菓子な  
どを持参した。

まるで某氏に会うのが目的ではなく、受付の女性に会うのが目的  
であるかのように振る舞うのだ。

「某氏はお忙しいのでしょね」

目的は逸脱してはいけないが、今日は暖かい日であるとか、寒い  
日であるとか、何気ない話題も提供した。

受付の女性は、最初は花もお菓子も受け取らない。また私の会話  
にも乗ってこない。私のような客は徹底して断るべしと、よく教育  
されているのだろう。これはこれで感心すべきである。

しかし訪問が度重たびなると、彼女も人の子である。私に対する同情  
心が湧いてくる。この人は、なんとしても某氏に会いたいのだ、会  
わなければ立場が悪くなるのだと思うようになる。

「某氏は、今日の午後からは特段の用事がなく、面会できる時間が  
あると思います」

ついに、受付の女性が言った。

この瞬間を待っていたのだ。私は間髪かんはつを容れず、ぜひほんの少し  
でもいいのでお時間を頂きたいと頭を下げた。

「承知しました」

ようやく面会時間を取ることができた。

午後に再訪した私は、某氏の執務室に案内された。

室内は広く、豪華なテーブルやソファが配置されている。男性秘書に、そちらへどうぞとソファに座るように促されても、はい、と返事をするだけで決して腰を下ろさない。

某氏が執務室に入ってくるまで再三、座るように勧められても私は座らない。

「お待たせしました」

某氏が執務室に入ってきた。

立って待っている私を見て、意外だったのか、驚いた顔をする。

「まあ、立ったままでは何ですから、お座りなさい」

某氏は、私にソファに腰掛けるように言う。

私はそれではと、ようやく腰を掛けるのだ。

「本日は、お忙しいところにお時間を頂き、申し訳ございません。どれくらいのお時間を頂けるのでしょうか？」

まず私は、某氏の多忙度合いを聞く。

「大丈夫ですよ。時間はありますから」

某氏は答えた。

しかし初対面である私は、某氏の言葉をそのまま鵜呑みにして長々と時間を費やすことはしない。

「わが社の専務の井上が、一度お会いしたいと申しております。お時間を頂ければ幸いです」

私は用件だけを伝える。

「そうですか。井上さんには私もお会いしたいと思っておりまして」

「それは何よりです。もしよろしければ日程を調整させていただいてよろしいでしょうか？」

「構いませんよ」

「ありがとうございます」

用件を果たした私は、長居せずにソファから立ち上がる。

最初の面会から長居はしてはいけない。相手は、非常に多忙な人物である。無駄話につき合っている時間はないのだ。

「では、失礼します」

「ちょっと待ちなさい。もう少し話をしましょう」

某氏が引き留める。

「お忙しい中をお時間頂けただけでも申し訳ありませんのに、これ以上お邪魔するわけには……」

私は遠慮する。

このような謙虚な態度が、大物の心を揺さぶるのである。あくまで相手より下であることを自覚した態度を取ることだ。

「あなたは福澤先生の義理の息子さんだと伺ったが……」

「はい、先生の次女を妻に頂いております」

「そうですか。福澤先生は偉大な方でしたな」

某氏は感慨深そうにつぶやく。そして私を見て、「あなたは私と会うのに、随分と時間と手間を費やされたようですね。福澤先生のお名前をお出しになれば、済みましたもの」

某氏は聞いた。その表情には、私の考えを読めない戸惑いもある。

「私などは、義父ちちの足元にも及ばない者ですので……」

私はあくまで謙虚な姿勢を崩さない。

某氏は、私のそうした姿勢に感心したように大きく頷く。

多くの人が、祖父や父親が偉いからといって、世の中になんの貢献もしていない自分までも偉いと勘違いした振る舞いをするという間違いを犯す。

これは大手の会社に勤務する者にも言える。自分が偉いのではない。会社が立派なのだ。それなのに会社の名を借りて、威張る者がいる。

いわゆる虎の威を借る狐である。このような者は最低だと心得るべきだ。

私が知っている経営者は、会社内の廊下にゴミが落ちていれば、

率先して拾う。また早朝に社員が出勤してくる前に会社の周辺を掃除する。このように経営者自らが、頭（かしら）を垂れるような謙虚な姿勢を見せると、勘違いした社員はいなくなる。

社員が会社の権威を笠に着て威張るのは、経営者に謙虚さがないからだとも言える。

「そうですか……。一度、あなたとじっくり福澤先生の思い出を語りたいたいものです」

某氏は言った。

「まことにありがたいお言葉を頂戴しました。ぜひ機会をお作りいただきたくと存じます」

私は感謝の気持ちを伝え、執務室を後にする。

某氏が見送ろうとするが、丁寧に断ることも重要である。

私は、このように政財界に影響力を持つ某氏に極めて謙虚に対応した。

その結果、某氏は私のことを気に入り、他の人に福澤桃介はなかなかの人物であるとの評価を伝えてくれた。

それを聞いた人の中には、私のことを生意気な男であると思っていた人もいただろう。ところが某氏の評価を聞いて、私を見直してくれるようになったのである。

さらに私が心掛けたことは、会社の気風を知り、それに同化する  
ことである。

家に家風、学校に校風があるように会社にも社風がある。これは  
人が集まるところに自ずと流れる、それぞれの人が醸し出す空気かもの  
ようなものである。

真面目な社風、派手な社風、質素な社風などさまざまである。ま  
ずはその社風を見極め、どっぶりつかることである。

北海道炭礦鉄道は以前にも勤めていたが、その頃、私は社風を変  
えてやると意気込んでいた。

あまりにも怠け者が多く、熱心に働くのはごく少数だったから  
だ。これでは会社は成り立たないと思っていた。しかし笛吹けど踊  
らずの言葉通り、誰も私の声に耳を傾けることはなかった。

しかし再度入社した私は、自分だけで社風を変えろという傲慢ごうまんさ  
を捨てた。とにかくまずは、文句を言わず従うことにしたのだ。

これに関しては異なる考えもあるだろう。贅沢ぜいたく過ぎる、無駄遣い  
が多い社風であれば、質素にすべきであると主張しなければいけな  
いと考えるのは当然のことだ。特に若い頃はそうだろう。

しかし誰もその意見に同調してくれなければ、孤立してしまう。社風の悪しき面があれば、それをちゃんと記憶し、変える時を待つことだ。

社風は、社長で変わる。井上専務のように質実剛健な人が上にいると、社内は引き締まり、誰もが黙々と働く。

そうになると、大した仕事の無い社員までが熱心に仕事をしているように見えるから不思議なものだ。

仕事をしている振りをするのも才能の一つだと思い、私もそのように努めた。

朝は、上役よりも早く出勤し、夜は、誰よりも遅く帰宅する。会社に到着したら、煙草タバコを吸ったり、茶を飲んだりしないで、すぐに机に向かう。書類を開き、ペンを動かす。こうして熱心に仕事をしていると見せかけることが必要だ。なまじ才能があり、さっさと書類を片付けてしまい、ぼんやりしていると怠け者と思われることがある。才能が、かえって仇あだとなるのだ。

こんな例は山ほどある。私も書類は素早く片付けるし、問題を解決するのも手際がいい方だと自負している。

しかし上役の誰もが仕事の才能があるとは限らない。部下である私あまり手際がいいと嫉妬しつとされてしまう。馬鹿にされているように上役は思ってしまうのだろう。

それで多くの才能が会社で芽を出さず、潰されてしまうのだ。

かの豊臣秀吉は、厳しい上役である織田信長に「猿、猿」と可愛がられ、結果として天下取りに成功した。

一方の明智光秀は、信長の厳しさ、いわば社風に耐え切れず反旗を翻した結果、非業の最期を遂げることになった。

自分が天下を取るまでは、社風に馴染むことが重要であること  
を、こうした歴史上の人物は教えてくれているのではないか。

私が社会的な立場を確立するためには、信用絶無の評価を覆さねばならない。

そのために、とにかく井上専務の視線を感じるところでは、忠実に必死で仕事をした。

例えば、私は井上専務とは椅子に座って話をしたことがない。いくら座るように勧められても、断固として立ったまま井上専務の指示を聞いた。

またお供をして出張したときのことだ。私は、決して背広を脱ぐことはなかった。深夜に呼び出しを受けた場合、浴衣で寛いでいたとしたら、駆け付けるのに手間取るからだ。着替えにぐずぐずしていたら大目玉を食らい、最悪は鹹になる。

お供はせいぜい数日のことだ。睡眠時間を削っても大したことはない。それよりも深夜の呼び出しに際して、即座に駆けつけたら上

役はどう思うだろうか。

あいつはいつでもすぐ駆けつける、常在戦場の心がけを持っている人物であると評価が高まるだろう。

私は井上専務にお供し、何度も出張に出たが、一度としてまとも  
に眠ったことはない。いつでも不眠不休の心がけで仕えていた。

こうして井上専務の信頼を勝ち得て成果を上げたのだが、なかで  
も白眉はくびは外債発行だろう。

明治三十七年（一九〇四）二月に、日本は強国ロシアと戦争を開  
始した。

ロシアは日清戦争に勝利した日本に対してフランス、ドイツの三  
国で遼東半島を返還させるなど、日本の中国、朝鮮への進出を阻ん  
でおり、日本国内ではロシア討つべしとの声が大きくなっていった。

しかし、日本とロシアの国力の差は歴然としていた。ロシアは日  
本の反対を無視し、南下政策を進め、ついに満洲まんしゅうを支配したので  
ある。このままでは、ロシアによって朝鮮における日本の利権が侵  
されるばかりか、安全保障上もロシアが大きな脅威となる。そこで  
ついに日本は、ロシアとの開戦に踏み切ったのである。

戦争準備のために多くの石炭が必要となり、北海道炭礦鉄道も活  
況を呈し、資金が必要となった。

私は、井上専務に外債発行を強く提案した。福澤先生が外債につ

いて積極的な論陣を張っていたのを知っていたからだ。

しかし外債を発行すると、外国人に会社を乗っ取られるなどと社内外で反対意見が渦巻いた。私はそうした意見に対し、これからの日本の会社は欧米で認められなければならない、そのためにも外債を発行すべきであると説いた。

乗っ取られるなどということはない。日本政府も日露戦争遂行のために外債の発行を計画していた。戦争には巨額の資金が必要になる。世界は広い。リスクがあるのは承知で、より大きな利益を求めて戦争当事国に肩入れする国や人が多くいるのだ。

ついに私は井上専務に外債発行を承知させた。そして苦勞の末、英国と交渉し、百万ポンドの調達に成功したのである。アメリカ留学で身につけた英語や社交性が、この時ほど役に立ったことはない。

こうして私は、井上専務の絶対的信頼を勝ち得ることに成功した。この効果は大きく、きん様やふさが安心したことはもちろんだが、塾内外での私の評価がずいぶんと向上したのである。

る。これが実際の生活において最も助けになることだ。それは貯蓄である。

私は、以前に北海道炭礦鉄道に勤務していた際、貯蓄を心掛けた。その結果、三千円ほどの資金を手にすることができた。その資金のうち千円を使って病床にありながら株式投資を行い、約十万円に増やした。

だが、株式投資に成功したことで、私は相場師の異名を持つことになり、ふさから批難されたばかりではなく、堅実を旨とする福澤門下の人たちから軽蔑けいそつされることにもなった。このことが丸三商会の失敗へとつながっている。

しかし、この株式投資で得た財産が今の生活を支えてくれているのも、また揺るぎない事実である。全ては貯蓄から始まったのだ。

私は、勤め人こそ貯蓄に励めと言いたい。

私には福澤先生の縁故があり、初めての月給が百円もあり、大いに恵まれていた。

これは例外中の例外であり、通常は二十円か三十円である。そして昇給するといっても一年に二、三元、多くて五円といったところではないだろうか。

経営者の方は、勤め人を働かせるために甘言かんげんを弄ろうする。数年間、真面目に勤務してくれば月給百円にも二百円にもするつもりだと

か……。

しかし、そんなものは空約束である。果たされることはない。信じて必死で働いた結果、身体を悪くして鹹になるのが落ちた。

こんな時、頼りになるのが貯蓄である。私だつて死病と言われた結核を患った際、人生が終わつたと思つた。妻子を路頭に迷わせてしまふと悲嘆に暮れたものである。

私がそうであつたように、勤め人というのは病気になると最悪である。だが、人生においていつ何時、病に倒れるかはわからない。

その時のためにも、勤め人こそ貯蓄に励まねばならないのだ。

また勤め人は、いつ何時、上役と衝突するかもわからない。社風に合わせて勤めようと思つていても、上役と意見が合わないことは絶えずあると覚悟した方がいい。その結果、鹹になったり、自ら退職したり……。勤め人の人生は、穏やかな春の日差しが続くことの方が少ない。むしろ冷たい風が吹き、時に嵐や吹雪ふがきになることの方が多いのである。

では、どのように貯蓄すればいいのか。それは月給からの天引きしかない。月給二十円、三十円でも必ず二割は貯蓄に回すことだ。そうすれば必ず貯蓄できる。

月給が多くても、それを散財しては貯蓄はできない。

二割も天引きしたら惨めみじな暮らしになると思うだろうが、そんな

ことはない。その金額に合わせた暮らしを工夫すればいいだけのことだ。

毎日、贅沢ぜいたくな食事をしたり、高級な洋服を着ることはない。たまに贅沢をし、たまに高級な洋服に袖を通すから、ありがたみがわかるのだ。

無駄遣い、すなわち浪費を防ぐ方法を工夫するのも楽しまねばならない。楽しめば、自然と儉約けんやくできるから不思議である。

また、些細さいさいなことのようだが、財布には多くのお金を入れないことだ。貯蓄ちそくができないのは、大金を使うからではない。つつい詰まらない、小さな物を買ってしまうからだ。店に入り、気に入った小物があったとしようか。それを買うのはいいとしても財布にお金があった場合、目的の小物の傍そばにある別の小物にも手を出し、ついでに買ってしまうことがある。

大した金額ではない。数十銭のことかもしれないが、積もり積もっていくと大きな金額の浪費になってしまう。

どうしても必要な物は書きつけてから店に立ち寄るのがいい。それ以外の物には手を出さないのだ。そうすれば、ついで買いの浪費を防ぐことができるだろう。

財布にお金を入れないためにも、お金は銀行に預けるに限る。銀行に預けておけば、引き出す際に手間を伴うからだ。とにかく余分

なお金は財布に入れないことだ。

また、お金を使う場合の損得を考えることも重要である。

例えば目的地に行く場合でも歩く、車、汽車、電車などの多様な手段があるが、どれが最も安く効率的、かつ約束の時間に間に合うか、考えるべきである。本当に小さな節約かもしれないが、重要なことだ。電車を使って約束の時間より早く目的地に到着した場合、どこかで時間を潰さねばならなくなる。そうなると店に入っ  
て、お茶の一杯も飲もうということになり、無駄なお金が出てしまうことになるのだ。

いずれにしても浪費を防ぐ工夫はすればするほど楽しくなるものだ。ケチになるのではない。私の知人は、こうして貯蓄したお金で書生を養い、彼らを世に出しながら十分に満足できる生活をしている。

福澤先生も同じだった。決して浪費はされなかった。貯蓄は十分にあったが、それを世のため人のために使ったのである。だからお金は巡り巡って福澤先生の下に戻ってきた。福澤先生は、お金を愛したというより人を愛した。その結果、愛した人が、お金を持って福澤先生の下へ戻ってきたため、塾は大きく発展したのだ。

さてここからが私の真骨頂なのだが、やはり株式投資は止められなかった。

堅実な貯蓄を勧めながら、株式投資を勧めるのは矛盾があるではないかと思われるかもしれないが、それは間違っている。

矛盾を矛盾と思わない軽薄さを持ち合わせることも、人生を豊かにする方法の一つである。

人生は矛盾の連続であり、理屈の通らないことの方が多い。朝令暮改でいいのだ。一筋縄でいかないから楽しい。そう思えばいい。

私が、病に倒れた時、いったい誰が助けてくれたか。誰も助けてくれない。私が丸三商会で失敗した時だって、あざ笑う人はいても誰も助けてくれなかった。

人徳の無さであると十分に自覚はしているものの、悔しく、かつ寂しいと感じたものである。

では何が、私を助けてくれたのか。それは株式投資である。

貯蓄の三千円の内、千円を株式投資に回して、私は十万円を得た。これが人生を変えたという話をしたが、このように貯蓄の全額を株式投資に回すのではなく、一部だけでも株式投資に回せば生活を豊かにしてくれる。

自分の貯蓄の一部で購入できる株を買えばいい。株価が低い株で、配当がそこそこあれば貯蓄の利息より有利である。

値上がりしているからといって不安定な経営をしている会社の株を購入してはいけない。そんな会社の株を購入したら貯蓄の全てを

無くしてしまうだろう。

経営が安定した電気、ガスなどの会社の株を選ぶべきである。また一社に全てを投資するのではなく、幾つかの会社に分散して投資するのがいい。たとえ一社が倒産しても、被害を最小限に抑えられるからだ。

私は、福澤先生やふさから叱責を受けても、こっそりと株式投資を続けていた。

大損をしてしまう可能性のある株式投資をなぜ止めないのか。それは独立自尊のためである。

私のような軽薄で腰の定まらない人間は、勤め人として全うできるはずがない。丸三商会の失敗で、手ひどく痛めつけられ、信用絶無とまで評価を下げてしまったために北海道炭礦鉄道に再度入社し、真面目に勤めているだけだ。

自分でもおかしいほど真面目に勤め過ぎている。お陰で勤め人が出世するためにはどのようなことが必要であるか、また勤め人の心情とはどのようなものであるかが体得できた。これは将来に向けての大きいなる収穫だろう。

井上専務の私に対する評価はうなぎ上りで、桃介はすっかり変わった、真面目になった、立派になったと福澤門下の人たちにも広めてくれたのである。信用絶無からの脱却である。

その一方で、私は株でかなり利益を上げていた。いずれ実業界に打って出るといふ気持ちはあったが、先立つものは資金である。他人の資金をあてにして商売を始めるのは、もうこりこりである。三井銀行の村上ごときに頭を下げる屈辱は二度と味わいたくない。

出世するために社風にどっぷりつかかり、誰よりも早く出社して、誰よりも遅く帰宅する。仕事がないときは、さも仕事をしている振りまでしている。こうしたことは、いつまでもできることではない。一生を勤め人として上役に仕え続けるには、相当な忍耐とそれなりの才能が必要である。私は、そうしたものを持ち合わせている人を尊敬するが、残念ながら私にはない。

私は、やはり軽薄である。一か所に留まることができない。根っから堪え性がないのである。私は早く勤め人から脱却し、自分の資金で事業を興し、自分がトップに立たねばならないと考えた。

そこで私は北海道炭礦鉄道の株を買い占めて会社ごと乗っ取り、トップに立とうと考え、ひそかに会社の株を買い始めたのである。

その頃、日露戦争による石炭需要の増大などで業績が好調な会社は、一株十二・五円で新株を発行した。これが投資家に好評で買いを誘い、またたくまに三十円、三十五円と値上がりしたのだ。

雨宮敬次郎あまみやけいじろうなど主要な役員が、この値上がりにより手持ち株を売り、利益を得た。自分の会社の株の売買で利益を得るなどというのは許

されないと考えないでもなかったが、私は売りに出された株をさらに買ったのである。

これが井上専務の知るところとなり、激怒された。

「桃介君、相場を止めたまえ」

井上専務は、私を呼びだして言った。

正直に言っただけ私は迷い、沈黙した。

「君は、私によく仕えてくれた。非常に感謝もし、評価もしている。そんな君が相場を諦めていなかったとは残念だ。泉下の大先生もきつと悲しまれていることだろう。真面目に働く気はないのかね。見損なっちゃよ」

井上専務の表情は暗く、悲しみに満ちていた。

私は、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。井上専務は、どん底の私を拾い上げ、もう一度、世の評価に堪えるところまで押し上げてくれた恩人である。

しかし私は、やはり他人の下で一生を送るより、たとえ落ちぶれようとも自分の両足で立っていたと思う人間である。

「申し訳ありませんが、相場を止めることはできません。いつか実業界に入るためにも自分の資金が必要です」

「相場は危ない。財産の全てを失うこともあるじゃないか」

井上専務は株式投資をしないため、その危険性ばかりを強調す

る。

「そんな危険は冒さないつもりです。お世話になりましたが、退職させていただきたいと存じます」

私は頭を下げた。

「ここまで言っても、君の決心が変わらないのであれば仕方がない。勝手にしなさい。止めることはしない。ただし失敗しても、仏の顔も三度はないからね。覚悟しておきなさい」

井上専務の顔がこれまでになく厳しくなった。

「承知しております」

私は再度、深々と頭を下げた。

明治三十九年（一九〇六）十月十五日、私は北海道炭礦鉄道を退社し、相場に本格的に身を投じたのである。

## 6

日本はロシアとの戦争に勝利し、賠償金こそ得ることはできなかったが、中国大陸に進出し、朝鮮をも支配下におさめるという躍進振りだった。重工業は活況を極めていた。

こうした好景気を受けて、株式市場は過熱し、株価は騰貴し<sup>とらうき</sup>続いていたのである。

株式投資專業となった私は、面白いほど利益を上げることができた。私のことを株成金、飛將軍などと揶揄する声も聞こえてきた。

たまに帰宅し、ふさに会うと、軽蔑しきつた顔を見せた。真面目に勤めに励んでいると思っていたのに、騙されたという気持ちが顔に表れていた。

私は、気にしないようにしていた。ふさと子どもたちには一切迷惑をかけるつもりもなかったから、毎月の生活費は潤沢に渡していた。

かつて十万円が刻印された通帳を見て、気を失うほど驚いたふさである。今、数百万円（現在価値は数十億円以上）にもなっているのを知ると、気を失うどころではないだろう。

私には、相場に関して天賦の才があるように思う。これは決してうぬぼれでも何でもない。

軽薄であるが、浮かれる一方で、醒めてもいる。生来の臆病な氣質なのかもしれない。言葉を選ぶなら慎重なのだ。

だから徹底的な失敗はしない代わりに、安田善次郎や大倉喜八郎のような大金持ちにはなれないだろう。それはそれで残念なのが、人それぞれ持ち味があるということに納得せざるを得ない。

私は軽薄だが、愚かではない。軽薄だが、慎重である。そんな私に、ある予感がした。胸の辺りが痞える感じがするのだ。

株を売れ！

天の声が聞こえた気がした。私はその声に素直に従った。手持ちの株をどんどん売った。勿論、空売りも行った。

私は株価が下がると思って、売る。ところが株価は上昇を続けた。私の損失は膨らみ、収めている証拠金では不足する。そのため追敷おいじきという追加の証拠金を収めねばならない。このまま騰貴が続くと、私は追敷を収められずに破産するかもしれない。

私が売っているのは、相場師仲間に知れ渡っていた。大バカ者だと言う者もいた。株は騰貴する一方だからだ。

さすがの私も危機感を覚えた。今度ばかりは天の声を聞き間違えたか。

ある日、松永安左エ門まつながやすぎ えもんがやってきた。彼には丸三商会で迷惑をかけた。その後、一人で事業を始めたが、上手く行かず、私の家で食客となっていた。

このままでは彼は駄目になると思い、五百円を渡して、大した金額ではないがこれで何か事業を始めたらいいと言った。

彼は喜んで我が家から飛び出し、福松商会を設立し、仲買業を始めた。福は福澤、松は松永である。なんとも安易な名前ではあるが、綿花や石炭を商い、それなりに利益を上げたのである。

適当なところで妥協していればいいものの、松永は六百万円まで

稼ぐと言って、株式投資に手を出した。

私は、止めろと言った。彼には、商売人の勘はない。どちらかと言えば政治家向きである。胆力と物おじしない性格から、政界に打って出るべきだと言ったのだが、どうしても六百万円を稼ぐと言っ  
てきかない。

株価は上昇していた。株を購入し、にわか成金が多く誕生した。  
あちこちで儲けた、儲かったの聲がかまびすしい。

松永は、今度ばかりは桃介さんも思惑が外れましたね、と得意顔  
である。

「松永君、君は相場に向かない。手持ち株は売った方がいい。大損  
するぞ」

私は彼の得意げな顔に、塩でも塗りつけるような助言を行った。  
「なんの、なんの、そんな弱気でどうするのですか。まだまだ買  
いますよ」

松永は強気一辺倒である。

私は弱気になった。本当に間違っただろうか。そんなはずはな  
いと思いたいのだが……。

日本国内は日露戦争で勝利して以来、重工業などの産業は過熱し  
ている。しかし中国、朝鮮、台湾と勢力を広め過ぎた日本の国力  
は、息も絶え絶えである。ロシアから賠償金を取れなかったため、

外債で調達した巨額の戦費の返済にも窮しているではないか。このような状況で株価の騰貴が続くはずがない。近いうちにガラガラと音を立てて崩れるガラ（大暴落）が到来することは間違いない。年が明け、一月になった。私は、どこからともなく数万株の北海道炭礦鉄道の株が売りに出された情報を得た。

三井銀行だ……。

私は、北海道炭礦鉄道の大株主の動向を詳細に把握している。この時期に数万もの単位で売りに出すのは、三井銀行以外にないと確信した。

そこで三井銀行の営業部長の池田成彬いけだしげあきを訪ねた。

「北炭株を大量売却したのは貴行ですね」

単刀直入に聞いた。

明らかに池田は動揺し、「デタラメを言うな」と怒った。

私は薄笑いを浮かべ、「顔に書いてあります」と言いおいて、その場を後にした。小躍りしたい気分だった。三井が売りに出たのだ。これで株価は下落する。

天にも昇る気持ちとはこのことだ。やはり天の声を聞き間違えてはいなかったのだ。

一月二十一日、歴史的ともいえる大暴落となった。

日本一の成金と言われた「鈴木久」すずきゆうこと鈴木久五郎すずきゆうごろうもすつからか

んになり、長屋住まいとなった。

私の忠告を聞かなかった松永も大損し、追敷を取り立てる輩やからから逃げる始末である。

年末の大納会で七百八十円ほどあった株価が、一月足らずで九十円、九十二円まで大暴落してしまったのだ。

買いに向かっていたにわか成金たちのほとんどが破産した。

私は兜かぶと町で「逃げの桃介」という異名をとった。自分でもいつたいいくららの利益を上げたか、はっきりとわからないほどだ。数百万円は得ただろう。一生で使い切れない金額だ。

ここまで相場で成功すると、名前が独り歩きし始める。私に会社の発起人になってほしいと門前市を成す状態となる。いざ発起人になると、桃介が発起人なら必ず儲かるとばかりに、投資家が群がってくる。私は単純に名前を貸しているだけだ。会社の事業には全く関心がない。そして株価が上がると、売却する。利益が上がる。私は、兜町の成功者として、努力しなくても名前だけで儲かるようになってしまった。

死にたいほど、面白くない。なんの努力もせずに金だけが儲かる。これはおかしい。金を持った瞬間から、ますます金が集まる。

金は、それを愛する者の傍に集まると言う。その理屈からすれば私は他人の何倍も金を愛していることになる。それでは金の亡者

だ。私は、それほど金を欲しいなど思っているのだろうか。必要な金は得てしまった。ふさや子どもたちに一生惨めな思いをさせることはないだろう。

一番不満なのは、これだけ金を儲けたのに誰からも尊敬されないことだ。相場師というのは、まるで軽蔑の対象であるかのようなようだ。株成金などという蔑称で呼ばれるのは腹立たしいかぎりだ。

私が発起人として名を連ねるだけで金を儲けることに対して、成功者としての当然の報酬であると評価してくれる者はいない。

むしろ、「いい加減にしろ。お前が発起人になっているから信用して株を買ったら、大損したではないか」などと金の亡者たちから非難されてしまう。

さらにやたらと寄付をしろ、援助しろなどと私の金をあてにする者たちも集まってくる。

このままではいけない。私はなぜ株式投資をしたのか。それは桃介でなくてはできないことをやり遂げ、何者かになるためではなかったのか。

松永は、私の忠告を聞かず、株の暴落で全ての財産を無くし、債  
鬼きに追われていた。私は松永に対し、君は楽天家で、気が横溢おういつし  
ている、他の人なら大きな波に襲われたら、もはや再起不能である  
が、君はそうではない、まだまだなんとかなる、と再起に向けた資  
金を援助し、励ました。

松永は、政治家に向いていると私が評価したように、非常に打た  
れ強い。それは私以上だ。この上なき楽天家であり、人たらしでも  
ある。やはりなんとか生き延び、九州で石炭、コークス事業をどう  
にか軌道に乗せたようだ。

「桃介さん、相談がある」

松永が神妙な顔で言った。

「金の無心かね。支援しないこともないが……」

私は松永がどんな話を持つてくるか、楽しみだった。

私と松永は兄弟以上の関係である。なにかと言えば、松永を頼り  
にする。松永も同じだ。だからといって利用し、利用されるような  
非情で冷徹な関係ではない。

要するに松永といると、損得抜きで楽しいのだ。彼と一緒に夢を  
見るのが嬉しいのだ。彼は、私のように皮肉屋、偽悪家でもなく、  
軽薄でもない。失敗は多いが、堅実で、努力家で、私のようにふわ  
ふわせず、一つの道を全うする人物である。私と正反対であるから

こそ、関係することが愉快なのだろう。

「九州で一旗あげませんか」

「九州？ 君の地盤だね」

「東京は三井、三菱の天下ですし、渋沢に可愛がられなければ、大きな事業はできません」

「まあ、そうだね。私は、あまり彼に好かれているとは思わないがね。それで東京を離れるというのか。都落ちを勧めるとは君らしくないね」

「都落ちではありません。地方で力を蓄えて、都に攻め上るのですよ。戦国大名のように」

松永は目を輝かせ、大きく両手を広げた。

「私を旗頭にして、都を占拠するようないい考えがあるのか。あるなら乗ってもいい」

私は松永の話に興味を覚えた。このままではただの株成金で終わってしまう。それでは桃介はいったい何者であったのか、何者になるうとしていたのか、という答えを得ることなく、死を迎えることになる。

「九州に電気鉄道を走らせるんですよ」

「電気鉄道か……」

安田善次郎が、東京と大阪の間に電車を走らす日本電気鉄道の設

立案を去年（明治四十年）の二月四日に発表していた。世の中は石炭で走る汽車から、電気で走る電車の時代に変わりつつあった。

「その話、乗った！」

私は即決した。

「さすが桃介さんだ。そうでなくちゃ」

松永が膝を叩いて、破顔した。

ふくはく 福博電気軌道の発起人になることを決意した。これが私の実業家

への大きな一歩になるという天の声が聞こえたのである。

〈つづく〉